

tokiwa



特別座談会

大学院教育の明日を語る。

tokiwa Contents

1 特別座談会

大学院教育の明日を語る。

学びのTOPIC

7 大学① 「プレゼン・バトル」開催

9 大学② 政策提言コンペへの参加

11 高校 トキワならではの英語教育

13 智学館 智学館フェスティバル

15 幼稚園 わくわくチャレンジ

17 研究紹介

イルカに学ぶ、「社会」の不思議

18 教員著書案内

表紙イラストについて

「学び、動き、広がる世界」

今号の巻頭では、大学院教育の展望についてご紹介しました。大学において学ぶことは、専門領域を深め、自己を探究することだけでなく、さまざまな領域の連関を発見することや、学んだことをどのように社会で生かすかにつながっていくものでもあります。学ぶことで新たなつながりが育ち、未来に向けてのアクションが生まれていく。学びの楽しさとは、新たな自己や世界と出会う可能性そのものであることを、イラストで表現しています。

illustrator 平野 こうじ



世界を
彩れ。



常盤大学は平成21年度
大学評価の結果、(財)大
学基準協会の大学基準
に適合していると認定さ
れました。



常盤短期大学は平成20
年度(財)短期大学基準
協会による第三者評価
の結果、適格と認定され
ました。



February 2012 vol.18

発行日 2012年2月
発行 学校法人常盤大学
編集 広報課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1
Tel.029-232-2511 (代)
<http://www.tokiwa.ac.jp/>

大学院教育の明日を語る。

1989年の設立以来、人間を中心に分野を越えて総合的・学際的な研究を展開してきた常磐大学大学院。
 その良き伝統のもと、研究者の養成とともに高度に優れた職業人の育成を目指し、時代の要請に合わせた改革を進めてきました。
 2005年には被害者学研究科修士課程設置とともに東京・芝浦にサテライトキャンパスを設置。
 学内には国際被害者学研究所や心理臨床センターなどの専門機関を設け、海外の研究機関や地域社会とのネットワークを強化しています。
 奨学金の充実や学会発表の支援制度など学生支援にも力を入れ、熱意ある留学生が学ぶ環境も整備してきました。
 こうした大学院の取り組みと、進むべき方向性について、理事長、学長、3研究科長にそれぞれの立場から意見を交わしていただきました。

Profile

諸澤 英道

学校法人常磐大学
理事長

慶應義塾大学法学研究科博士課程修了。常磐大学副学長、学長を経て、2003年1月より現職。常磐大学大学院人間科学研究科博士課程(後期)教授、同大学院被害者学研究科、同大学国際被害者学研究所の教授を併任。

森 征一

常磐大学・常磐短期大学
学長

一橋大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。慶應義塾大学教授、学校法人慶應義塾常任理事、2010年学校法人常磐大学常任理事を経て、2011年4月より現職。

森山 哲美

常磐大学大学院
人間科学研究科 研究科長
慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程修了。常磐大学副学長を経て、2011年4月より現職。常磐大学大学院人間科学研究科、同大学人間科学部コミュニケーション学科教授、心理臨床センター長。

小柳 武

常磐大学大学院
被害者学研究科 研究科長
東洋大学社会学部応用社会学科社会心理学専攻卒業。法務省矯正施設、国連アジア極東犯罪防止研修所、法務総合研究所等での勤務を経て、2011年4月より現職。常磐大学大学院被害者学研究科教授、同大学国際被害者学研究所教授を併任。

依田 泉

常磐大学
副学長(司会)
エール大学大学院中近東言語・文明学科博士課程修了。国際交流語学学習センター長を経て、2011年4月より現職。常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科、同大学国際学部経営学科教授。

水嶋 英治

常磐大学大学院
コミュニティ振興学研究科
研究科長
筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了。2008年4月より現職。常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科、同大学コミュニティ振興学部コミュニティ文化学科教授。

大学院教育の未来に向け、各研究科が取り組みを開始。

依田 本日は常磐大学大学院の教育について、現状を振り返りつつ、将来への展望を提示したいと思っております。ではまず、各研究科で注目される新たな取り組みについてご紹介いただきたいと思います。

森山 人間科学研究科の課題は人間が抱える問題を、世界的な視野で考察し、解決を目指すことにあります。

その環として2010年には韓国テグサイバー大学と学術交流を活性化するための提携を結びました。東日本大震災後は安否を気づかうメールがすぐに寄せられ、精神的なつながりも研究活動の励みになっています。

諸澤 森山先生が中心になって行われている博士課程の「コロキウム」参照や3研究科合同の修士論文発表会は本大学院の特徴的な取り組みではないでしょうか。

森山 はい、合同修士論文発表会やコロキウムには、他の研究科の視点を通して、自身の研究の位置付けを客観的に理解するという

意義があります。また、3研究科には人間の抱えている問題を理解し、支援していくという点で共通の問題意識があり、これを共有することで、学問の領域を越えた発展がもたらされることも期待しています。

依田 本大学院の学際的な研究体制を表す好例ですね。コミュニティ振興学研究科はいかがでしょう。

水嶋 東日本大震災によって生じた諸問題に対応するため、まず被災地の現地調査などから調査研究を開始しています。また、震災直後から、国立韓国伝統文化学校や台湾の国立台北教育大学など「提携大学」(コラム2参照)をはじめ、海外から非常に多くの問い合わせがありました。留学生の力により、逐次情報を発信することができました。

また、国立韓国伝統文化学校との提携では歴史都市の保護保全、防災も含めた共同研究を進める計画で、そのインターフェイスとなるのも留学生だろうと考えています。さらにブリティッシュコロンビア大学(カナダ)から提携の打診をいただき具体化に向けて進んでいます。

Column:01

人間科学研究科博士課程(後期)では分野の異なる研究者が集う学内研究発表会=コロキウムを年2回、定期的に開催しています。

人間科学研究科博士課程(後期)では、コロキウムと呼ばれる学内研究発表会を、春 semester 終了時と秋 semester 終了時の、年2回行っています。コロキウムは博士課程(後期)に在籍する院生にとって、それまでの研究成果を発表する場であり、定期的に発表を行うことが段階的に学位論文を仕上げていくためのステップにもなっています。

コロキウムは、専門分野の異なる研究者が参加することに特徴があります。その分野に関する専門家ではない相手に対しても理解しやすい内容にすることを意識して発表を行うことは、第一に、そのための資料作成や説明を準備することによって、自分の研究をさらに深める効果があります。第二に、分野の異なる研究者の発表を聞き、自らの研究に新たな視点やヒント

を与えてくれる機会にもなります。

コロキウムで発表する資格は、博士課程(後期)の在籍者と修了者、あるいは修士課程修了者で研究生となっている者、さらに博士學位取得後の研究者や専任教員、客員研究員にもあるため、活発な研究成果の発表と議論、意見交換の場となることが期待されています。



「本学の研究・教育活動の成果を国内、海外に発信し、アピールすることが交流の活性化に役立つでしょう。」

—— 水嶋

水嶋 同感です。さらに言うなら、受け入れ態勢の充実を図るとともに、その動きを国内からこそ、今回のような緊急時にもいち早く反応をいただけたのでしょうか。被害者学研究科においても、多くの海外連携が推進されていますね。

依田 日頃から提携大学と活発な交流があるからこそ、今回のような緊急時にもいち早く反応をいただけたのでしょうか。被害者学研究科においても、多くの海外連携が推進されていますね。

大学院教育の実質化、そして内外への情報発信の強化。

依田 では、大学院に課せられている課題という視点から、各研究科の将来構想をお話してください。

森山 大学院教育の実質化が求められる中、多様なニーズを持っている方たちどう対応されるかが本当に求められている状況なのだろうなと思います。

水嶋 同感です。さらに言うなら、受け入れ態勢の充実を図るとともに、その動きを国内からこそ、今回のような緊急時にもいち早く反応をいただけたのでしょうか。被害者学研究科においても、多くの海外連携が推進されていますね。

依田 では、大学院に課せられている課題という視点から、各研究科の将来構想をお話してください。

内外に発信していくことも重要でしょう。



※アカデミックリテラシー…専門教育を学ぶ基礎として必要とされるスキル。

「高等教育を受けた人々のリカレント教育の場として大学院の重要性は増すばかり。さまざまな人を受け入れる態勢を整えたい。」

—— 諸澤



依田 こうした各研究科の現状を踏まえて、森山長は今後の展望をどのようにお考えでしょうか。

建学の精神である実学を継承し今日的な課題に挑む。

依田 本大学院がその研究活動を通して、国際的にも存在感を示していることは近年特に意義深さを感じています。そうした発展

依田 日頃から提携大学と活発な交流があるからこそ、今回のような緊急時にもいち早く反応をいただけたのでしょうか。被害者学研究科においても、多くの海外連携が推進されていますね。

依田 日頃から提携大学と活発な交流があるからこそ、今回のような緊急時にもいち早く反応をいただけたのでしょうか。被害者学研究科においても、多くの海外連携が推進されていますね。

依田 本大学院がその研究活動を通して、国際的にも存在感を示していることは近年特に意義深さを感じています。そうした発展

国内において高等教育を受けた層の人口が増えたことよって、例えばリカレント教育(※)の場としての大学院の重要性は今後ますます増していくでしょう。

依田 本大学院がその研究活動を通して、国際的にも存在感を示していることは近年特に意義深さを感じています。そうした発展

依田 本大学院がその研究活動を通して、国際的にも存在感を示していることは近年特に意義深さを感じています。そうした発展

依田 本大学院がその研究活動を通して、国際的にも存在感を示していることは近年特に意義深さを感じています。そうした発展

※リカレント教育…社会人が必要に応じて受ける再教育。

Column:02

常磐大学は韓国・台湾の大学と連携協力協定を締結し、国際的な学術文化交流を図っていきます。

世界的な視野を持つ人材の育成を目指し、常磐大学は、2010年3月23日に国立韓国伝統文化学校と、同年3月25日に国立台北教育大学と、連携協力協定を結びました。目的は、学術文化交流に向けて、教育・研究と教員研修における長期協力関係を確立することにあります。教員と学生による交流として、短期交流プログラムなども予定されています。

特に博物館学の研究分野での学術交流が盛んで、2011年3月には日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要に国立韓国伝統文化学校の崔種浩教授からの招へい論文を掲載。また2011年11月には、国立台北教育大学などが主催する「博物館国際会議2011」に常磐大学も共催として参加しました。テーマは「国立博物館とナショナルアイデンティティ」。

世界的博物館・美術館が、急激な政治や経済の環境変化にどう対応していくべきか、という問題意識で、博物館の存在意義、機能、影響度、今日的な課題などについて、学際的かつ国際的に議論することが目的でした。期間中は博物館従事者、研究者、学生などが、活発に意見交換を行い、博物館を国際的に検討する有意義な会議となりました。



「大学院で学ぶ人々の多様化を念頭におきアカデミックリテラシーを開発するための教育の充実を図るべきだと考えています。」

—— 森山

「被害者学研究科に寄せられる
国内外の専門家からの期待の大きさを
感じ、それに応えることを目指しています。」



— 小柳

ています。大学院教育も今後ますますアジア地域に向き合っていくか否きなりません。

依田 内外に情報を発信することは、未来に向けた大学院教育のビジョンを示すためにも無視できない取り組みとなります。すでにそうした試みも始まっているということですね。

森 講義をオンラインで世界に配信するシステムも、世界の各大学で行われています。インターネット上のメディアの可能性は非常に多様ですので、さまざまな方策を考えていきたいものです。

世界へのステップとして
まずアジアの拠点化を目指す。

水嶋 コミュニティ振興学研究科の今後のビジョンとしては、コミュニティ振興を考える上で、新たに農業や観光という視点を取り入れ、観光・農業、観光政策、農業政策といった科目の新設を計画しています。

弘道館の建物や所蔵されている資料をデジタル化し、インターネットを通じて情報を配信するデジタル・アーカイブプロジェクトについても、現在の活動を基盤として、情報学や歴史研究などさまざまな専門分野の研究者と協働し、学際的な知の拠点をつくりたいと考えています。

またグローバル化に関しては、まずアジア地域における拠点づくりを目指し、さらに世界各国へ発展していくことが現実的だと考えています。その足掛かりとして、4万冊という世界的にも稀な文献蔵書を公開し、アジアの教育拠点として活用することを考えています。

依田 そのためにも、先ほど議題に出た情報発信の充実が欠かせない要素になりそうです。

害者人ひとりの状況に合わせた支援を行うためには、実践を学ぶ機会が欠かせません。最近の計画としては自治体と提携し、被害者の支援を学生が実際に体験する機会を充実させようと考えています。

学際的な研究に関しては、学生たちの学部時代の専攻を見ますと、教育学、社会学、心理学、法学などさまざまな分野を学んでいます。セミナーやシンポジウムなどの活動においても、被害者学だけではなく多様な分野の第一線で活躍されている方々とともに、実務につながる研究を行い、政策立案につなげるという形にしていきたいと思えます。

依田 被害者学研究科はその成り立ちから学際的なビジョンを持ち、また国際的にも重要なポジションにあるということですね。

キーワードは「使える知」。
多様性もたらす成果に期待。

小柳 もちろん、本研究科は国内においても被害者学研究の拠点として、その重要性和責任の再認識のもと、周辺領域の学問との連携を深めなければなりません。さらに高度な研究を進めていくために、博士課程の設置を含めた検討も必要だと感じています。

森 博士課程を検討する際には、本学の建学の精神を根底に置くことが大事だと思います。つまり、社会への貢献という観点から、従来のただ知識として知っているという意味での「知」ではなく、専門教育と実践が結び付いた、社会に生かせる「使える知」でなければならぬ。それが常磐大学大学院らしい特色となるはずですね。

依田 「使える知」は重要なキーワードになりそうです。大学院教育も今後ますますアジア地域に向き合っていくか否きなりません。

依田 内外に情報を発信することは、未来に向けた大学院教育のビジョンを示すためにも無視できない取り組みとなります。すでにそうした試みも始まっているということですね。

森 講義をオンラインで世界に配信するシステムも、世界の各大学で行われています。インターネット上のメディアの可能性は非常に多様ですので、さまざまな方策を考えていきたいものです。



す。では、被害者学研究科の今後の展望はいかがでしょう。

小柳 国際的な連携を深めることは本研究科の変わらぬ方針です。特に、地理的な関係からいえば、やはりアジア諸国との連携を深めるべきでしょう。アジア地域で被害者学を専門的に学べる大学院は、現在のところ本学のみです。アジア地域の学生を対象にした研修の充実、留学生の受け入れ強化は、継続して取り組みたい課題です。

諸澤 本学ではセメスター制度も1993年からと、国内ではかなり早い時期に導入するなどグローバルスタンダードを意識して取り組んできた実績があります。こうした基本精神と体制が国際交流の活発化に役立っているのではないのでしょうか。

小柳 そうした体制に加え、将来社会で使

りそうです。

森山 「使える知」という言葉を聞いて「餌えている人に魚を与えるより、魚の釣り方を教えたほうがいい」という意味の中国の格言を思い出しました。学長のおっしゃる「使える知」はその「魚の釣り方を学ぶ」ということに当たると思っています。

学び得たことをもとに、さらに新たな「魚の釣り方」をそれぞれが工夫していくという発展性まで含めて、実践しながら思考する姿勢の基礎を築く訓練を大学院教育で行う必要があるのではないかと思いました。さまざまなニーズと多様なスキルを持つ院生一人ひとりの高度な専門性を開発することに一層務めたいと思っています。

小柳 シンポジウムなど国際的な場で、被害者学研究科の研究体制と研究教育内容について解説してほしいという要望を度々お寄せいただきます。内外の専門家からの注目が大きくなっていることを近年ますます感じています。また、東日本大震災の被災者支援についても、政策立案に向けた期待の大きさに応えたいと思っています。

諸澤 先日のシンポジウムでも、震災からの復興へ、国・地域を越えて、一人ひとりが関わっていくことの大切さを再確認しました。この分野の研究に対するニーズはますます高まっていると感じます。しかし、世界的に見ても被害者学を研究している機関は決して多くありません。各国の大学で被害者学に関する学科・研究科を創設する際、本学にその教育内容について評価を求めてくるケースが多いことから、本学が一層のリーダーシップを発揮しなければならないと考えています。



水嶋 世界から注目され、さまざまな人材が集うことで、議論はさらに多様化されまます。そうした環境の中で、それぞれの研究がより活性化し、広い視野や深い考察が得られるということもあるはずですね。多様性がもたらす成果を楽しみにしたいですね。

森 つまるところ学問とは何かと問われたとき、それは「生きる力」を修得していくことだと考えています。より専門性を高めた学びを提供し、それぞれの期する道が研究者であれ、実務家であれ、身に付けた力を実践し、しかも、それぞれの現場でリーダーシップを発揮しうる。そうした力強い人材の育成を、これからの大学院のひとつの目標としたいと思えます。

依田 常磐大学大学院の実績と研究力、教育力を結集して、高度な専門性を備え、社会に貢献できる人材を育てていきましょう。本日は、貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

「研究者であれ、実務家であれ、それぞれの現場で
リーダーシップを発揮する人材の育成を目指して、
研究・教育環境の整備を進めていきましょう。」

— 森



Column:03

被害者学研究科の研究機関である国際被害者学研究所が
第6回シンポジウム「自然災害の被災者支援—グラスルーツからガバナンスへ—」
(Helping the Victims of Natural Disasters: From Grassroots to Governance)を開催しました。



国際被害者学研究所による第6回シンポジウムが、国連大学(渋谷区)で2011年9月30日、10月1日の2日間にわたり開催されました。今回のシンポジウムは一般的な議論ではなく、東日本大震災に被害者学的な視点でアプローチし、自然災害の被災者がどのような影響を受け、また、どのような支援を受けられるのか、複雑に絡み合った側面

をよりよく理解することに主眼が置かれました。「災害被害を理解する」と題された第1部の冒頭では宮城県石巻市で津波被害に遭った木村輝子氏が「経済的にも精神的にも苦しみが続いている被災地の現状を忘れずに、ここにいる一人ひとりと、被災者に寄り添って共に復興への道を歩いてほしい」と訴えました。それに続くパネルディス

カッション、社会・心理的支援をテーマにした第2部、ガバナンスの視点から大規模災害に備える国家的な戦略構築の重要性を提言した第3部、それぞれに、人々の苦しみを軽減し、回復を促進しようと専門家が一堂に集い、熱のこもった講演と意見交換を行いました。



国際学部 経営学科

茨城県経営者協会

共同研究概要

★ 研究テーマ

茨城県内企業の新卒就職
ミスマッチ解消の研究

★ 内容

茨城県内の大学生は、県内企業への就職を視野に入れている人が多いにもかかわらず、企業側からは、応募者の少なさ、内定に至る学生の少なさ、採用内定後の辞退、あるいは入社後の早期離職者の増加といった、新卒就職のミスマッチを問題視する声がありました。このような茨城県内企業の新卒就職ミスマッチを解消し、両者のマッチングを向上させるための具体的な施策を、実際に就職活動に臨む学生とともに研究しました。効果の見込める施策については、茨城県経営者協会による採用・就職活動支援「みんなの就職部」で事業化される予定です。

★ 研究担当者

国際学部経営学科教員3人
国際学部学生21人

★ 主な研究期間

2011年5月～10月

2011年10月30日に開催された常磐大学の学園祭「ときわ祭」において、国際学部経営学科の主催する「プレゼン・バトル」の第10回が実施されました。プレゼン・バトルとは、地域の企業から与えられた現実の課題をテーマに、学科内のゼミを主体とした複数の学生チームが解決のための具体案を考案・発表し、その完成度を競い合うというイベントです。

2011年度の課題は、経営学科と茨城県経営者協会との就職支援策に関する共同研究プロジェクトで、テーマは「茨城県内企業の新卒就職ミスマッチ解消のための新提案」。県内には堅実な経営でその業界や地域で高い信頼を得ている有力な中小企業が多数あるにもかかわらず、そうした現実を知らないままに大企業志向で就職活動を進める学生が多いという現状の課題を改善する案を、当事者である学生たちの視点で考えました。

参加したのは依田泉ゼミ、村山元理ゼミ、文堂弘之ゼミの学生たち。いずれも就職活動を控えた3年生が中心となつて、ゼミごとにチームを組んでプロジェクトに取り組みました。それぞれ企業へのヒアリング調査を行い、どうすれば学生が魅力ある県内企業に関心を向け、志望動機を高められるかを考えました。また、中間発表などの場では、経営者協会からアドバイザーをいたしながら、発表に向けて精度を高めていき



ました。迎えた「ときわ祭」の当日、3チームは練り上げたアイデアをプレゼンテーションの形式にまとめ、経営者協会の役員や企業の方々、一般の来場者や学生たちの前で発表しました。SWOT分析という経営戦略の知識を使って分析した依田ゼミ、大学のキャリア支援センターでの情報収集や学生対象のアンケートなどを行った村山ゼミ、ミスマッチ要因を企業側と学生・大学側に分け、それぞれの対策を考えた文堂ゼミと発表にはチームごとの個性がよく表れていました。

最終的には、文堂ゼミが優勝を勝ち取りましたが、3チームとも企業からの質問にも的確な回答を行っていた様子から、学生たちの成長ぶりがかがえました。茨城県経営者協会専務理事の清水賢一氏からは、「どのチームも熱心

この問題に取り組んでくれたと感じた。今回いただいた提案は検討の上で実現に向けていきたいと考えている。今後ぜひ力添えをお願いしたい」と丁寧な講評をいただきました。

この問題に取り組むまで、私たちの中小企業に対するイメージは白紙に近い状態でした。しかし、調査を始めても、県内に本社を持つ企業が思った以上に多く、就職先として魅力ある企業が少なくないことを知りました。また、経営者協会様のご協力で、企業の経営者から直接お話を聞く機会に恵まれたことで、中小企業には、経営者との距離が近い、経営についてより身近に考えられる環境、面倒見の良い風土など、大企業にはない働きがいがあることもわかりました。こうした事実が伝わっていないことが就職ミスマッチの原因だと考え、学生と地元企業の接点をもっと充実させるためのアイデアを中心に発表を行いました。プロジェクトを通して、役割と責任を分担し、仲間と力を合わせれば、より良い提案ができると実感したことも、これから社会に出る上で大きな収穫になりました。

Presentation Battle

企業と学生・大学のそれぞれに解決のためのプランを提案。

私たちはミスマッチの要因を分析した上で、企業側には、認知度を高め、採用への熱意を大学内でアピールする「中小企業PR大作戦!」「ぶっちゃけ親睦会」「学生による業種紹介ビデオ」を、学生・大学側には、早期から就職に対する意識を高め、危機感を持たせる「就職対策カリキュラム」「就活つらいよノート」「説明会認知度・参加率向上作戦」を提案しました。発表を通して、会場のダイレクトな反響を感じ、自信を得ることができました。



「プレゼン・バトル」開催

企業の現実が課題、だから学生の力が伸びる。

学びのTOPIC

大 学
UNIVERSITY

Interview



国際学部経営学科 准教授 文堂 弘之

チームでプロジェクトを遂行する力を身に付け 経営者協会の方から高い評価をいただきました。

企業からの課題を気づかせる上では、与えられた期限内に具体策を提案するという責任が伴います。さらに、今回の就職ミスマッチは学生自身が当事者でもあり、企業側の期待は例年にも増して大きなものでした。学生たちはプレッシャーを感じながらも、それぞれの個性や責任感を発揮してくれたと思います。議論を通して徐々にチームとしてのまとまりを見せるようになったのは、経営者協会の方々からの期待に応えたいという思いがあればこそ。発表当日に備え、来場者からの質問に答えられるよう準備をしていた様子からは、企画や発表のスキルだけでなく意識の面でも、大きな成長を感じさせてくれました。また、調査を通して中小企業の実像や魅力について改めて知ったことは、一人ひとりが卒業後のキャリアを考える上でも意義深いものになったのではないかと思います。

Seminar Profile

文堂ゼミナール

実践の中でプレゼンテーション能力を磨くゼミ。

地元企業との産学連携プロジェクトへの参加を通して、社会人基礎力の習得に取り組んできました。プレゼン・バトルという目標に向かって、学生自身で役割分担やスケジュール管理を行い、チームで課題の解決を図る。そのプロセスで責任感や論理的に考え抜く力、発想力、表現力を鍛え、将来、社会で独自の提案や実行ができる人材へと成長してもらいたいです。



国際学部経営学科3年 廣木 仁隆



コミュニティ振興学部地域政策学科3年 細谷 大輔

コンペに向けて最も苦労したのは、一人ひとりの考えを集約し、一つの提言としてまとめることでした。調査を通して、発表に盛り込みたいことが数多く見出され、話し合いが日付をまたぐこともありましたが、目標を共有しているもの同士、お互いを認め、最後まで妥協せず議論したことで、提案としてまとめることができました。いただいた奨励金は自治体の調査に活用させていただきました。より多くの地域を実際に歩いて比較できたこと、自治体職員の方から直接インターネットではわからない情報を聞くことができ、発表に厚みが増したと思います。自分が住んでいる地域についても日頃から目を向け考える必要があると感じ、身に付けた協調性・行動力を生かして、将来は地域の活性化に貢献できる仕事に就くことが目標です。

Column

自治体間のネットワークの重要性を提言。

茨城県内の震災の被害状況を調べ、帰宅困難者への対応と通信機能の不全が大きな課題だったことに注目し、三郷市とその周辺自治体の防災体制と比較。一方で三郷市と被災地「広野町」との協定が有効に機能したことが、今後の防災計画と広域ネットワークを考える上で重要になることを提言しました。



伝えたいことをどう絞り込むかが提案のカギでした。



コミュニティ振興学部地域政策学科3年 井坂 美春

横須賀ゼミでは、メンバー全員がゼミ長の役割を経験するために、必ず一つの部門のリーダーを担当することが特徴です。私は今回、三郷市の発表資料作成のリーダーと、藤沢市のフォーラムでのプレゼンテーションを担当しました。先生の提案で2つの発表チームを作り、ぎりぎりまで発表担当を決めなかったことが良い緊張感になったと思います。プレゼンテーションのまさに直前に私が発表を担当することに決まったのですが、2チームそれぞれで発表の精度を高めてきたことで、自信を持って、堂々と発表ができました。残念ながら入賞はかえりませんが、調査や資料作り、発表を通して、文章力やプレゼンテーション能力、少々のことではたじろがない度胸がついたことが大きな成果でした。

Column

藤沢市のこれからの「減災まちづくり」に向けて。

震災後、石巻市でのボランティア活動に参加した横須賀ゼミの学生たちは、災害を完全に防ぐことは不可能だと痛感しました。今後は被害をできる限り減らすための「減災」という考えに基づいたまちづくりを行う必要があると考え、震災の教訓をもとに「防災のトップランナー藤沢」から「減災まちづくりのバイオニア藤沢」への方策を提言しました。



全員が一度はリーダーを経験するゼミです。



コミュニティ振興学部 総合講座 教授 横須賀 徹

政策提言コンペへの参加は学生が社会との関わりを深め、また社会に巣立つ自信を育てる場として、5年前からゼミの活動に取り入れてきました。コンペに参加するからにはもちろん勝つために全力を尽くしますが、賞を逃したとしても、経験という財産が得られます。仮説を立ててテーマを決め、調査を通して現状に疑問を持つ視点や、仲間と自主的に互いの意見をぶつけ合う姿勢を身に付けるなど、その成長ぶりは目覚ましいものがあります。そのような面でも、今回の奨励金は学生にとって非常に大切な役割を果たしてくれました。納得のいくまで何度も現地に足を運んで調査できたこと、とことん研究に打ち込めたことで、学生たちの自信はひととき大きなものになりました。

Seminar Profile

横須賀ゼミナール

横須賀ゼミでは、学生が積極的に社会との接点を持つため、政策提言コンペへの参加を活動の中心に置いています。発表を作り上げる過程で学ぶことの多さはもとより、他大学の発表や企業・団体からの質疑・講評を通して、成果の振り返りを行うことができ、課題解決思考を継続的・自発的に育てていこうとする意欲につながっています。



社会の実態を調査研究することは、学生の問題意識を刺激します。

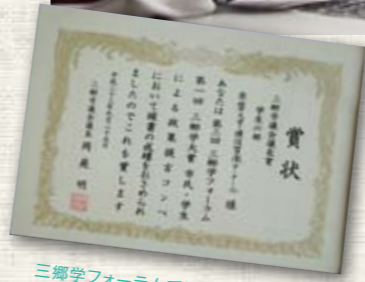
災害に強いまちをつくるために。

常磐大学同窓会課外活動奨励金をゼミ活動に活用。



三郷学フォーラムの政策提言コンペで第2位を受賞。

2011年9月25日に埼玉県三郷市で行われた「第3回三郷学フォーラム 市民・学生による政策提言コンペ」に、コミュニティ振興学部の横須賀ゼミから学生チームが出場し、三郷市議会議長賞(第2位)を受賞しました。学生たちは「震災から見た日本の自治の在り方〜三郷学から広げる自治のあるべき姿〜」をテーマに、茨城県内の自治体と三郷市ならびに周辺自治体の被害状況や災害時の対応を調査し、その比較を通して防災対策の強化などの政策を提言しました。



三郷学フォーラムでは、第2位を受賞。

公共政策フォーラムin藤沢では、減災をテーマに発表。

さらに続く10月29日には、藤沢市で行われた日本公共政策学会の学生政策コンペにも参加。三郷学に引き続きの共通課題である「減災まちづくりの政策形成とその実現に向けて」というテーマで発表を行い、こちらは入賞こそ逃したものの、限られた期間の中でチームワークを発揮し、学ぶところの多いチャレンジとなりました。今回の横須賀ゼミの学外コンペ参加活動は、「常磐大学同窓会課外活動奨励金」の給付対象として選定されました。奨励金は、学生たちのより深く、より広範囲にわたる調査活動に役立てられました。コミュニティ振興学部には、地域の政策立案に携わる進路を目指す学生も多く、県内・県外の方



さまざまな自治体を訪問し、防災政策の違いを知った今回のプロジェクトは、将来に向けて大きな収穫になったと参加した学生たちは語りました。

※常磐大学の発展および社会貢献に寄与できる、またはそれが期待できる常磐大学学生の課外活動に対して常磐大学同窓会が給付する奨励金です。学生プロジェクト奨励金とスポーツ文化活動奨励金の2種類があります。

「第3回三郷学フォーラム 市民・学生による政策提言コンペ」

三郷市が2010年度から取り組んでいる「三郷学」は三郷市の地域資源について学び、三郷の歩むべき方向性を考え、実際の政策に反映させることが目的。その一環として2011年9月に行われた「第3回三郷学フォーラム」では、市民の知恵と工夫を市政やまちづくりに生かすための政策提言コンペが実施されました。

「日本公共政策学会公共政策フォーラム」

日本公共政策学会では、公共政策フォーラムが毎年開催され、学生による政策提案の機会やシンポジウムを展開しています。2011年の課題は「減災まちづくりの政策形成とその実現に向けて」について。開催地である藤沢市の取り組みを参考にしながら、10大学20ゼミが提言を行いました。



Interview



英語を話すことへの抵抗がなくなりました。

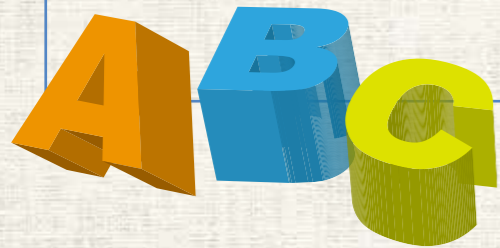
1年8組 富田 南海 (写真左)

「オーラルコミュニケーション」は、とにかく楽しく学べることが印象的でした。中学生の頃は、みんなの前で英語を話すのが恥ずかしから、発音もきちんとできていませんでしたが、この授業ではヘッドセットを通してジェイソン先生と1対1で話せるため、英語を話すことへの抵抗が次第になくなっていきました。その場で発音のポイントをアドバイスしていただけるので、間違いもすぐ修正できます。パソコンを使って離れた席の友人と英語で会話ができるのも楽しみのひとつ。誰とペアを組むかはジェイソン先生がランダムに選んでくださるので、いろいろな人と練習ができ、勉強になります。練習の会話は録音されていて、上手に発音できた人の例をスピーカーで聴かせてくれるため、どんどん理解が深まります。街で外国人の方に道を尋ねられた時も気軽に答えられるようになるために、この授業で、聴く、話す力を楽しく高めたいと思っています。

英語で話す機会がとても多い授業です。

1年8組 藤枝 慶次 (写真右)

ネイティブスピーカーの先生の英語に触れ、実際に日常生活で使える、生きた英会話表現を学べるのが「オーラルコミュニケーション」の一番の魅力だと思います。CALL Laboではパソコンを使って授業が行われることが新鮮でした。少人数のクラスであることと、ヘッドセットなどを活用することで、先生や友人と楽しくたくさん会話のトレーニングができます。もともと会話は苦手だったのですが、入学した時と比べて、発音を意識しながら話すことができるようになったと思います。ジェイソン先生がフランクな雰囲気です。授業を盛り上げてくださいますし、パソコンの操作にも慣れてきて、英語を学ぶことが好きになりました。英作文や文法は得意なので、この授業を通してヒアリングと会話力を高め、苦手意識を克服して、もっと英語が使えるようになりたいと思います。



常盤大学高等学校の英語教育の特色

日本にいなから、本場の英語を学ぶことができます。

常盤大学高等学校の英語教育は、聴く・話す力を伸ばし、世界各国で対話できる力を育てることに注力しています。その授業の代表が「オーラルコミュニケーション」です。ネイティブスピーカーの教員による、ほぼ英語のみで展開される授業を通して、正しい発音を学ぶことができます。またこの科目は、通常のクラスを半分に分けて少人数で行われるため、きめ細かい指導が受けられることも特徴です。この授業では、ネイティブスピーカーの教員が会話を中心とした分野を担当し、日本人教員が英語の基礎となる文法や英作文の分野を担当し、連携しながら授業を展開しています。

合言葉は「Enjoy English!」

英語が苦手でも、話すほどに好きになる、新しい学びスタイル。



常盤大学高等学校で使用されている、英会話学習ツール、CALL Labo (Computer Assisted Language Learning) が、2011年9月からリニューアルされました。最新のソフトウェアを導入したことにより、教員と生徒、あるいは生徒同士がヘッドセットを通して会話の練習をしたり、クラス内で英語のみのチャットができるなど、より実践的かつ効率的な英会話を学べるようになりました。

授業で使用する教材の自由度も一気に高まりました。海外の映画やニュース映像などを生徒一人ひとりの閲覧するパソコンのモニターや教室のスクリーンに映し、生きた英語のヒアリングを訓練できます。また、発音を音声波形で表示してくれるアプリケーションソフトを活用して、ネイティブの教員と自分の発音の違いを、耳だけでなく、目でも確かめながらトレーニングすることが出来ます。

より正確な発音を身に付けるための新しい機能が充実したうえに、各種検定やTOEIC、センター試験対策のソフトも最新のものにバージョンアップ。新しいデジタル教材は「基礎力アップ」「センター試験対策」「資格試験対策」など全部で13コースあり、近く生徒の自宅のパソコンからも利用できるようになる予定です。

聴く、話す授業。実践的に英会話を学びます。

最新の機材でコミュニケーション力をアップ。

検定やセンター試験に向け、自学自習も可能になります。

Interview

少人数のクラスで、英語の上達をサポート。

英語科 砂見 聡 (写真左)

「世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。」という学校法人常盤大学の教育の基本理念の基、教室の内外で英語を使う機会を増やすことを目指しています。そのために、1年次全コース必修の「オーラルコミュニケーション」では、少人数で授業を行い、できるだけ教員と生徒全員が話し、より多くのコミュニケーションを図れるようにしています。リニューアルしたCALL Laboによって生徒たちの英語力がどこまで向上するか楽しみです。

何よりも大切なのは、Enjoyする心です。

ALT ジェイソン・コシ (写真右)

授業を基本的に英語のみで行うのは、英語を日常的なものと感じてほしいからです。生徒には、何よりも英語を楽しんでもらうことを大切にしています。CALL Laboのシステムを使いこなすことで、楽しく学ぶことができていないのではないかと思います。英会話の面白いところは、例えばフォーマルな場とフランクな場など、TPOによって使われる言葉に違いがあることです。そのため、会話と合わせて英語圏の文化を学ぶことも大事にしています。世界のどんな場所でも通用する、より実践的な表現を学んでいきましょう。





短い準備期間でも納得できる
仕上がりにしたのは
一人ひとりの頑張りのおかげです。

2011年度生徒会長 3年次1組 木下 耕志

智学館フェスティバルでは、これまであまり接点がなかった生徒同士で協力して作業をしたり、仲の良い友人の意外な一面に気づいたり、普段の学校生活では経験できないことがたくさんありました。9月の「智学館カップ(体育祭)」が終わってすぐ、1カ月ほどの短い期間で、「ピタゴラスイッチ」とクラスの出し物や展示を仕上げるのは大変でした。どのクラスも何かしら課題を抱えながら、それでも、最後はみんなが納得できるものになったのは、各クラスの一人ひとりが力を出し合った結果でした。今回の智学館フェスティバルのテーマである「INFINITY(無限大)」は、未熟なところもある僕たちだからこそ、可能性も無限大という意味だったと感じています。また、生徒会の仕事を通して、人との接し方や優先順位をつけて行動することを学びました。前期課程の生徒が会長になるのは、今年だけの特例です。これからは後期課程の先輩方が生徒会や実行委員を務めるので、今回のフェスティバルは、今回よりもさらに大きく立派なものになることをとても楽しみにしています。



見事、大賞を獲得した作品とクラスのメンバー。リーダーとともに、イメージを形にしようと頑張った結果の受賞に、みんなが大きな達成感を体験しました。



行事を通して生まれるクラスのまとまりは、
本物に違いありません。

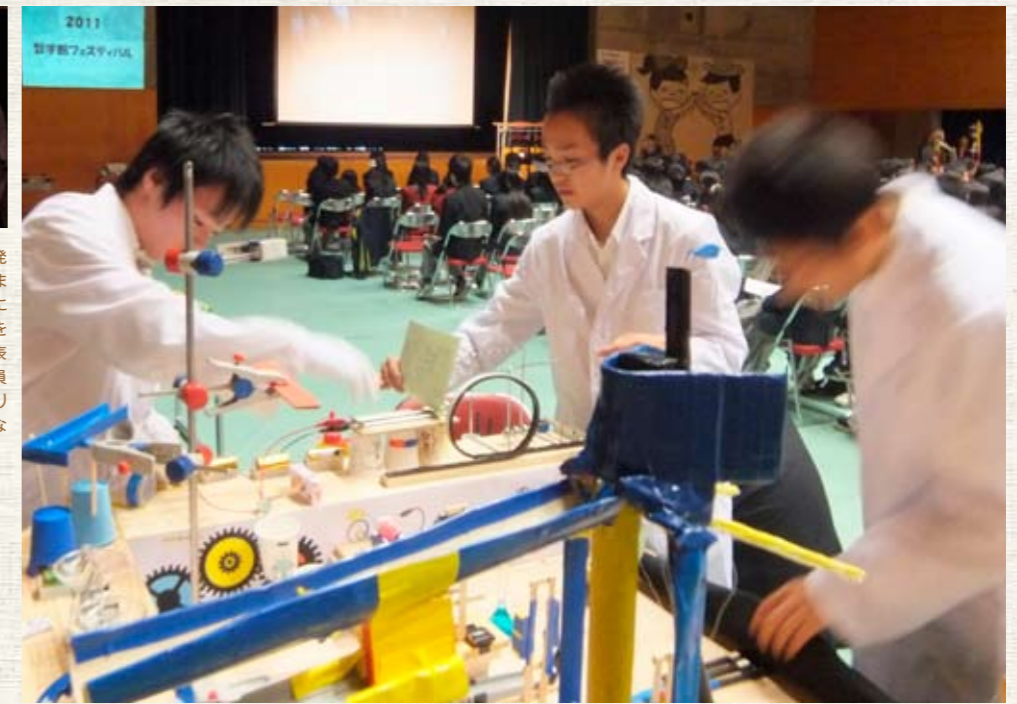
生徒会顧問 橋本 伸弘

智学館では年度の当初にクラス目標を話し合いで決めていきます。例えばそれが「団結」であれば、4月の時点ではまだ抽象的な言葉にすぎません。しかし、いざ行事などの準備が始まると、一人ひとりの意欲のレベルが異なることが明らかになってきます。そして、本当にクラスが団結するためには何かが必要でどんな困難が伴うかを、実践を通して学べるのが、こうした行事の大きな意義だと言えるでしょう。

当初は、生徒だけの力でここまで完成度の高いフェスティバルが出来上がるとは考えていませんでした。良い意味で私の予想を裏切ってくれた生徒たちの活躍はうれしい限りです。石川校長も最後のあいさつで「感動した」とコメントしたように、教員の助けがなくても、これだけのことができる実感は、彼らの大きな自信になったと思います。生徒たちの潜在能力の高さを、今後学習や学校生活の場面で、どのように引き出していくか。それが我々教員に課せられた課題であり、責任だとあらためて感じています。



NHK教育テレビの番組「ピタゴラスイッチ」から発想を得て、装置を設計。ボールを転がし、さまざまな仕掛けを通してゴールさせるのは単純だけに奥が深いです。この日のために準備してきたことを出し切りたい。ゴールまで転がり続けるよう、発表前の最後の調整に余念がありません。観覧者全員の投票によるコンクール形式。企画・構成や転がり方のアイデア、プレゼンテーションなど、さまざまな項目から審査されました。



2年間の成長を示した
フェスティバル。

開学以来2回目となる「智学館フェスティバル」が2011年10月22日に開催されました。2年前の第1回は、1・2年次生たちのみで、教員たちもさまざまな面で運営をサポートしていました。しかし今回は、どのクラスも驚くほど自主性を発揮して企画・実行にあたり、この2年間の成長ぶりを頼もしく感じるフェスティバルになりました。

生徒たちの笑顔が
何よりの成果です。

2年に1度の催しだけに、準備にも力が入ります。来場した人全てに楽しんでもらえる催しにしよう、放課後や昼休みなどの自由時間を有効に活用し、ときには休日も登校して、生徒たちは大きな頑張りを見せていました。各クラスとも、活発な話し合いや共同作業を通して、意見の食い違いや失敗を乗り越えていきました。その成果は、当日のステージや展示の完成度、盛り上がる空気そして、生徒たちの笑顔が雄弁に物語っていました。

生徒たちの創造性は無限大。

2011年の「智学館フェスティバル」で見せた
生徒たちの自主性や企画力、実践力は、
まさに今回の全体テーマ「INFINITY」そのものでした。

学びのTOPIC
智学館
SECONDARY SCHOOL



「智学館フェスティバル」

第2回目となる今回は、「INFINITY(無限大)」がテーマ。全学年全クラスが参加する「ピタゴラスイッチ」、4年次生はフードコート(飲食コーナー)を担当し、1~3年次生は舞台発表や映像作品、展示発表を行いました。各クラスそれぞれのアイデアや工夫が凝らされた企画は、見ごたえのある内容ばかりで、ご来場いただいた方からの評価も高いフェスティバルになりました。



五感を刺激して、好奇心の芽を伸ばす。 3歳からの健やかな発達に、 たくさん「わくわく」と「チャレンジ」を。

小さな発明家たちが不思議を体験。

子どもたちはいつも興味のアンテナを広げ、新しい遊びを考える小さな発明家です。子どもたちのこうした好奇心や冒険心をもっと上手に引き出し、楽しく遊びながら、将来の成長につながるような体験をさせたい。それが、常磐大学 常磐短期大学の教員との連携によって展開されている「わくわくチャレンジ」の目的です。

2008年5月、「楽しく運動」から始まったこの試みは回を重ね、2011年度からは科学、音楽と多様な科目に発展してきました。プログラムは、常磐大学 人間科学部教育学科と常磐短期大学 幼児教育保育学科の教員が企画し、園児たちの指導にも直接当たっています。各教員の専門性を生かした内容には、遊びを通して心と身体の発達を促すよう工夫が凝らされています。最新の幼児教育研究を現場に直接反映できることは、学校法人 常磐大学としての強みでもあります。園児たちは、さまざまな教員と触れ合うことで世界を広げ、また園の教員にとっても、新たな発想に触れることが良い刺激となっています。さまざまなチャレンジを通して子どもたちが「一番楽しいと思うこと」を見つけてもらい、さらに修了後の人生において、本当に学びたい分野へとつながっていくことを目指しています。



Interview



常磐大学・常磐短期大学の研究成果が、園児たちの可能性を引き出します。

常磐大学幼稚園 園長 竹中 治利

「わくわくチャレンジ」の活動の翌日、さっそく大学の先生から教わったことを遊びに取り入れている園児たちの様子を見ると、その吸収力に驚くとともに、プログラムで蒔かれた種が園児の心で芽吹いたことを実感します。大学の先生方の発想や専門性が園教育に加わることで、ご家庭や園での日々の生活における子どもたちの世界がさらに大きく広がります。ますます充実するプログラムにご期待ください。



Interview



演奏をしたり、歌ったり、それだけが音楽の入口ではありません。

常磐短期大学 幼児教育保育学科 助教 鈴木 範之

一般に音楽教育は、歌にしろ楽器演奏にしろ、繰り返し練習をして完成された形に音楽を「仕上げる」ことが中心課題でした。わくわくチャレンジでは、その手前の「音を聴く」という原点から発して、子どもたちが自分で好きな音を見つけ、それがゆくゆくは一人ひとりの音楽のベースになるように、いろいろ「仕掛ける」ことを目指しています。

今回は、スプーンなど台所にある道具を使って、どんな音が鳴るのかを試してみました。スプーンを叩いたときの子どもの表情からは、聴覚を研ぎ澄ませて音に集中していることが分かります。聴いている子の表情の変化に周りのお友達も強い興味を示し、次第に「自分で鳴らしてみたい」という声が上がってきました。自主性の芽生えという面でも、一つのきっかけになれば、と思います。他の身近なものにはどんな音が隠れているか、いろいろ試して遊びながら、好きな音を見つけてくれることを期待しています。



「目を閉じて、耳を澄ましてみましょう」。鈴木先生の呼びかけで、遊戯室に集まった園児たちは、静まり返った空気の中で、聴こえてくる音を探します。「カーテンがさらさらって鳴ってた!」「ものが落ちる音がした!」。この日の「音をさがそう」は、子どもたちの周囲にたくさんある、豊かな「音」に気がしてもらおうことが狙いでした。さらに電気を消して先生が鳴らす鐘の音を頼りに先生のいる場所を当てたり、木や金属の食器を使って、材料ごとに音の響きが違うことを発見したり。子どもたちは先生がさまざまなに鳴らす音の世界に引き込まれ、その不思議に表情を輝かせていました。



音が聴こえたときの表情はとも豊かです。お友たちと一緒に、夢中で鳴らし比べる園児たち。



スプーンを糸でつないだ紙コップは、先生手作りの教材。紙コップを耳に当てると、普通に聴くよりも、音の違いがよく分かります。



カーテンを閉め暗くし、目を閉じて、先生が部屋のあちこちで鳴らす鐘の方向を指さします。みんなよく当てられていました。

「音をさがそう」



不思議や驚きに出会うとき子どもたちの「科学の芽」が、顔を出します。

常磐大学 人間科学部 教育学科 助教 鈴木 宏昭

自然に接する中で「あれっ?」「なぜ?」と思う気持ちが「科学の芽」*であり、これを伸ばすことが「科学で遊ぼう」のテーマです。そのために、全てのプログラムを通して、不思議を感じることを、わくわくすること、そして何より五感を拡張することを心がけています。今回の虫メガネでは視覚、また別の日のプログラムでは「スライム」づくりを通して触覚など、さまざまな教材を通して五感から探究心の芽を育てることを目指しています。

もう一つの考えとして、一人ひとりの個別体験を重視しています。みんなと一緒にだけでなく、自分のペースで、自分の興味に従って行動することは、「科学の芽」を育てる上で重要です。安全を確保することが最優先ですが、幼稚園の先生方と学生サポートのおかげで、子どもたちはのびのびと活動できています。一人ひとりが五感で体験し、それぞれ違う「芽」が生まれる。そんな瞬間に立ち会えることを願っています。



10月の良く晴れた日、園庭に集合した園児たちの手にはそれぞれ虫メガネが。この日の「科学で遊ぼう」は、「園庭のすみずみまで虫メガネで大きく見てみよう!」というものです。最初に鈴木宏昭先生と「絶対に太陽を見ないこと」という約束をして、園児たちは思い思いの場所へ駆けていきます。普段見慣れた花や葉っぱ、砂や水、虫たちを、虫メガネでのぞくと何が見えるでしょう。先生に教えられながら虫メガネの上手な使い方、工夫して、自分の好きなものを見つけて観察したり、お友達が見ているものを一緒にのぞいたり。小さな世界を大きく広げる楽しさに出会って、冒険のようなひとときに、歓声を上げていました。



クモを見つけた子のまわりに、先生とみんなが集まって、「クモの足は何本あるかな?」「8本!」小さな発見の瞬間です。



自然いっぱい園庭を、虫メガネで拡大。水の流れ、砂粒の形、葉や花びらの形を、じっくり観察します。



それぞれにお気に入りの場所を探検。何かを見つけて、「せんせい! これ、見て!」と呼ぶ声があちこちから上がります。

「科学で遊ぼう」



*「科学の芽」という言葉は、ノーベル賞受賞者である朝永振一郎先生が書かれた言葉から引用しています。

Books

教員著書案内



- ① よくわかる刑事政策
- ② 藤本 哲也
被害者学研究所 教授
- ③ 藤本 哲也 著
- ④ 2011年9月
- ⑤ ミネルヴァ書房

本書は、(1)刑事政策の基礎、(2)犯罪原因論、(3)犯罪者に対する刑事制裁と処遇手続、(4)犯罪者処遇の諸問題、(5)各種犯罪とその対策、(6)刑事政策の現代的課題から構成。100項目の課題を見聞き2頁で解説しています。



- ① 企業不正対応の実務QA
- ② 藤本 哲也
被害者学研究所 教授
- ③ 八田道二 監修
一般社団法人日本公認不正検査士協会 編
- ④ 2011年10月
- ⑤ 同文館出版

本書は(1)不正に関する基礎知識、(2)不正の種類とスキーム、(3)不正調査、(4)不正防止のポイントから構成。94の質問に答える形式で解説が試みられています。4つのコラムも企業犯罪に係る解説をしています。



- ① 小児がんアトラス
- ② 秦 順一
人間科学部 教授
- ③ 秦 順一・浜崎豊・小林庸次 編著
- ④ 2010年12月
- ⑤ 金原出版

代表的な小児がんを症例ごとにまとめ、各症例の病理学的問題点や診断を行う際に陥りやすいピットホールを取り上げた成書。わが国で初めての小児がん症例の病理アトラスです。



- ① 心理測定尺度集V
- ② 太幡 直也
人間科学部 助教
- ③ 大内 晶子
短期大学 助教
- ④ 2011年3月
- ⑤ サイエンス社

2000年以降に公刊された心理尺度が収録されています。太幡は「夫婦関係」、大内は「共感性・ゆるし」「愛着・依存」「親子・家族関係」に関する尺度を紹介しています。



- ① 心理測定尺度集VI
- ② 太幡 直也
人間科学部 助教
- ③ 郷洋道 監修
松井豊・宮本聡介 編
- ④ 2011年3月
- ⑤ サイエンス社

本書は、2000年以降に公刊された、心理学の研究で使用される尺度を紹介したものです。太幡は「カウンセリング」に関する尺度を概観し、二つの尺度を紹介しています。



- ① ことばの事実をみつめて
言語研究の理論と実証
- ② 伊藤 礼子
国際学部 教授
- ③ 佐藤賢子・井川美子・鈴木芳枝・古谷孝子・松谷明美・都田青子・守田美子 編
- ④ 2011年7月
- ⑤ 開拓社

千葉修司津田塾大学教授の定年退職を記念し、教え子と同僚が長年のご指導に対する感謝をこめて執筆した、日本語や英語の言語事象を中心とする研究論文集です。



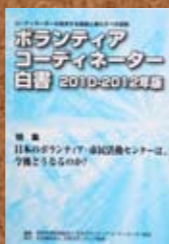
- ① テスティングと評価
4技能の測定から大学入試まで
- ② 小泉 利恵
国際学部 専任講師
- ③ 石川祥一・西田正・斉田智里 編
- ④ 2011年4月
- ⑤ 大修館書店

評価では、意図した能力を測り、社会によい影響を与えるために、使用目的に合わせて適切な方法を選ぶ必要があります。小泉はリスニング能力測定の理論を概括しました。



- ① 博物館学事典
- ② 水嶋 英治
コミュニティ振興学部 教授
- ③ 全日本博物館学会 編
- ④ 2011年8月
- ⑤ 雄山閣

全日本博物館学会の30周年記念事業として、本書を刊行することが2005年に決定しましたが、それから6年の歳月を経て、2011年に出版されました。



- ① ボランティアコーディネーター白書
2010-2012年版
- ② 池田 幸也
コミュニティ振興学部 教授
- ③ 日本ボランティアコーディネーター協会編
- ④ 2011年2月
- ⑤ 大阪ボランティア協会

日本におけるボランティア活動や市民活動の中間支援を行うコーディネーターの資質向上を目指す団体による白書。池田は「学校教育の動向とボランティアコーディネーターのあり方」を執筆。



- ① 介護予防支援と福祉コミュニティ
- ② 松村 直道
コミュニティ振興学部 教授
- ③ 松村直道 著
- ④ 2011年2月
- ⑤ 東信堂

本書は、茨城県内自治体を対象に、介護保険事業を取り巻くさまざまな地域福祉事業や組織を考察した論文の集大成で、一言でいえば「地方社会の福祉コミュニティ研究」です。



- ① 企業と秘書
- ② 高橋 眞知子
短期大学 教授
- ③ 大塚久代・水原道子 編著
- ④ 2011年4月
- ⑤ 樹村房

急激に変化する社会において企業が置かれている環境は一層厳しさを増しています。その中で経営トップのそばにあって業務遂行を目指す秘書とは何かを学ぶ本です。



- ① ビジネス実務総論
企業と働き方
- ② 高橋 眞知子
短期大学 教授
- ③ 水原道子 編著
- ④ 2011年4月
- ⑤ 樹村房

企業とは何か。そこで働くとは、どんな意味をもたらすのか。一人の社会人として、身に付けなければならない基本的な知識をキャリアデザインの視点から学ぶ本です。



- ① 勘定科目・仕訳事典
- ② 李 精
短期大学 准教授
- ③ 新田忠智・横山和夫・渋谷武夫・菊谷正人・尾畑裕 編
- ④ 2011年8月
- ⑤ 中央経済社

簿記・会計の基本である勘定科目や仕訳を再検討。学習者にとって理解しやすいように勘定科目の統一化を図り、また明瞭な仕訳処理を目指した新機軸の事典となっています。



- ① 新保育ライブラリ 保育の心理学II
子どもを知る
- ② 大内 晶子
短期大学 助教
- ③ 清水益治・無藤隆 編著
- ④ 2011年3月
- ⑤ 北大路書房

2008年の保育所保育指針の改定に伴い、「保育の心理学II」の内容も新たになりました。本書はその演習用テキストです。大内は「自己主張と自己統制」を執筆しました。



- ① イーストウッドの男たち
マスキュリティの表象分析
- ② 吉良 貴之
国際学部 嘱託研究員
- ③ ドウクシラ・コーネル 著
吉良貴之・仲正昌樹 監訳
- ④ 2011年3月
- ⑤ 御茶の水書房

フェミニスト法哲学者によるクリントン・イーストウッド監督作品の批評です。「男らしさ」の意外な弱さと、それゆえに可能になる豊かな可能性を鮮やかに示しています。

研究テーマ

鯨類の社会的認知に関する比較認知科学的研究

【平成21年度～23年度日本学術振興会・科学研究費補助金(基盤研究(C))に採択】



研究紹介

イルカに学ぶ、「社会」の不思議。

哺乳類の進化を解き明かす鍵を見つけるため、イルカやクジラの行動を追う。



イルカの知能は、ヒトやサルと比較されるほど高いと言われていながら、その研究は未開拓です。鯨類の研究を通して、動物が群れや社会をつくる仕組みに新たな視点を提供したいと考えています。

イルカは音で仲間を見分ける。では視覚ではどうか？

イルカは、波乗りを楽しんだり、パイを使って仲間同士で遊んだりするなど、野生のものでも行動はとても豊かです。観察していて飽きないのももちろん、何のたけに行っているのかまだ分からない振り舞いも多く、非常に興味をかき立てられる存在です。イルカが音で個体を認知していることは私のこれまでの研究を含まずさまざまな研究によって明らかにされつつありますが、「視覚」に関する研究は、これまでほとんど例がありませんでした。そこで今回の研究では「イルカは目で仲間を見分けられるのか？」という疑問を解き明かすこと、そして、イルカの社会的認知における視覚と聴覚の役割について検討することをテーマにしました。

結論から言いますと、ハンドウイルカという種にかぎっては、数メートル程度の距離なら、個体や種の違いを視覚で認識している可能性が高いことが分かっています。このような動物の社会的認知は、その種がどういった集団で生活しているかが大きく関わっています。ハンドウイルカは群れ構成を頻りに変える習性があるため、個体を見分ける力が発達したのではないかと考えています。



自然な状態でイルカを知るためには、野外調査も欠かせません。



水槽のガラス越しに置かれた大型テレビにイルカやシャチの姿を映す実験。仲間イルカに比べ、シャチなど異種の映像には注目する時間が長いことから、視覚で区別している可能性が高くなりました。

イルカの研究を通してヒトを理解する方法が見つかるかもしれません。

鯨類の研究にはもう一つ可能性があります。ヒトについて知るためには、ヒトが属する霊長類を研究するだけでは十分ではないという考え方があります。海で進化した鯨類という別の視点から研究することで、新たに分かることがあり、こうした研究が私たちヒトの進化を知る鍵になるかもしれません。それを推進するひとつの動きとして、2011年度から霊長類と鯨類の知性に関する比較研究を京都大学との共同で開始しました。比較を通じて、サルとイルカ、それぞれの社会の独自性を明らかにできればと考えています。皆さんもイルカに会う機会があったら、ぜひイルカの行動をよく観察してください。すると「あれは何をしているのだろうか？」という疑問が浮かぶはずです。その疑問に答えることが私の仕事であり、これからも研究を続けていきたいと思います。

常盤大学
コミュニティ振興学部 総合講座
教授 中原 史生